
明日に見えるは.....

赤田サチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日に見えるは……

【Nコード】

N6386C

【作者名】

赤田サチ

【あらすじ】

組織を倒し、無事に幸せを取り戻したと思えた新一の身に起きた悲惨な出来事と、それからの日々。

FILE00：序章（前書き）

初投稿です。 よろしくお願ひしますm┐┐m

FILE 00：序章

この世に生を受けた時から“運命”は定められているのか……。

こんなにも悲しい運命を変える事が出来るのなら、自らの手でねじ曲げ、正しい方向へと導いてやりたい。

しかし、そんな事は無理なのだ。

どんなに嘆き、苦しみ、傷付けられようと、一度起きてしまった出来事を、時空を越えやり直すのは不可能である。

再び正確に時を刻み始めた時計は、愛する人を置き去りにして進む。

あの日までの思い出を連れて――

FILE 01：再会

「新一……おかえり」

小さく真つ白な雪がちらつき、どこか寂しさを伴う北風が吹く中、彼女の声は、しっかりと新一の耳に届いた。彼女の優しい声と表情がそうさせたのか、新一は彼女を強く抱きしめた。

「ただいま、蘭」

今日まで、本当に辛い思いをさせてしまっていた事を、身近で痛い程感じていた。蘭の悲しそうな淋しそうな表情を見るたび、一刻も早く組織を倒し、元に姿に戻る事を――“工藤新一”に戻る事を、江戸川コナンは誓っていた。そして今、組織を倒す事に成功した“工藤新一”は、この世で最も大切な女性と再会する事が出来た。

「ごめん。本当に……。ずっと待たせて……心配させて」

新一の、蘭を抱きしめる力は、脆く、傷付きやすいモノを労り、フワリと包み込むかのように、優しくなっていた。

新一の表情には、申し訳ない気持ちが滲み出ていた。

自分が消えた時からの蘭の姿を思い浮かべ、心から謝罪した。

「いいよ。それより、ちゃんと約束守ったからね？ “待っててほしい” っていう約束……」

蘭は、冗談半分、本気半分の様子で、新一に言った。我慢していたのか、彼女の大きな目からは、涙が溢れていた。

「ありがとう」

それぞれ相手の体から手を離し、どちらからともなく笑い、新一は蘭の大粒の涙を拭ってやった。

「でも、まだ完全に許してないんだからね……今度何か奢りなさいよっ」なんて言葉が、まだ涙声ながら蘭の口から発せられる。

「なあんでも奢ってやるよ……ジュースか？　アイスか？」

「ちょっと、馬鹿にしてる？　そんな安いものじゃ済まないんだからね」

そう言いながら、蘭は何か企んでいるように笑った。

そんな蘭の、いつもと何ら変わらない態度が新一を安心させた。

漸く取り戻す事が出来た本当の時間。

これからも築き上げてゆく幸せの時。

——こうやって2人の時間が永遠に続くと、そう信じて疑わなかった。

FILE 01：再会（後書き）

テスト前だろうと関係ねえです……。もう本当に……。(T-T)
読んで頂きありがとうございます御座いました。

FILE 02・悲傷（前書き）

3連休ですしね……更新ですっ（*―*）

FILE 02：悲傷

新一と蘭が再会して、一週間。二人は、最近新しく建てられたショッピングモールにて、買い物をしていた。お互い口にくそ出さないが、いわゆる“デート”だ。

どこかで見た事があるようで、そうではない店内の様子を見回した。新しい店のおい、周囲の人々の様子。そして何より、新一にとっては、久々に見た幼馴染みの心からの笑顔、蘭にとっては、ずっと望んでいた幼馴染みの姿。どれを取っても新鮮で堪らなかった。様々なテナントを見歩いて後、今から一階の食品売り場で買い出しをするところだ。

「明日はクリスマススイブだし、服部君や和葉ちゃんも呼んでクリスマスパーティーやろうよ！……新一の家でっ！」

蘭は名案とばかりに新一に笑顔を向けた。

「……俺ん家？」

「そう、いいでしょ？ 私の家だとお父さんがいろいろうるさそうだしさ……。それが新一からの“奢り”だよ」

そんなもんでいいのかよ……とても言いた気な顔で返事を返した。

「いいに決まってるだろ？」

軽いデコピンと共に。

「痛っ！ そんなオマケいらないわよっ！」

そんなに痛くもないのに思わず口に出してしまうのは、誰にでもよくある事であり。誰から見ても熱々なこの二人は、クリスマスを数日後に控えた、より賑やかな店の雰囲気浮く事なく、よく溶け込んでいた。

「ええと、ケーキの材料は……。まず、小麦粉と卵に、生クリームそれから……」

「蘭、これだろ？イチゴ。これが無かったらクリスマスケーキじゃねえだろ……」

そう言つて新一が手渡した、透明のパックに収められビニールを掛けられた溢れんばかりの真っ赤なイチゴ。

「あっ！ ありがとう」

受け取った蘭は、まるでイチゴのように顔を染め、微笑んだ。

「それと、シャンパンとか買わねえとな。他にもつまみっぱいもんとかもいるし」

「新一……あんだ、思いの外ウキウキね」

楽しそうにも見えるが、呆れ顔ともとれる蘭の表情。

「そうか？」

目的を果たし、二人はあまり人気のない道を歩き、工藤邸へと向かっていった。

決して好ましくない空が、人々を見下ろしていた。……これから起こる悲劇を予想し、それを恐れるようにして。

「なんだか雲行きが怪しいね……」

遠く、向かい側から人が歩いてくるのが見える。

「ああ、そうだな……」

新一と蘭、その人との互いの距離が徐々に縮まる。

「……………」

その人の様子がはっきりと分かる位置。男だ。帽子を目深に被った……。そしてその男の懷から出されたのは、鋭く、ギラギラと光る、

ナイフ。

「なあ、蘭。あのさ……」

再び口を開いたその瞬間。
鈍い音が二人の耳に届いた。目が合った。帽子の影から覗く男の目と。

時が止まったようだった。

顔を下げれば足下に点々と落ちる、赤い染み。

——何事かコレは？

あまりにも突然の出来事で、何が起こったのか理解出来なかった。
そして再び男と目が合ってしまった。その手には、赤い染みの元になったと思われるあのナイフ。ただ一つ違ったのは、ベツタリと何かが付着していた事。

新一は、自分の中にまさかのシナリオを描いていた。一瞬意識を手放したと思うと、また現実に取り戻された。痛みのない自分の身体。とすると、これは……

「蘭っ！ おいつ蘭っ！ しっかりしろっ！」

新一は、自分が手にしていた袋を地面に落とした。嫌な予感、的中した。蘭の腹から流れでるおびただしい量の血液。新一は、自身の着ていた上着をすぐさま脱ぎ、蘭の患部を抑え、血を止めようと試みた。

「し……んい……」

「蘭っ、喋るなっ！ 喋らなくていいから……」

「……でも……」

「蘭っ！」

今にも消えてしまいそうな蘭の息の音が、新一をより一層苦しめた。

「今、救急車呼ぶから！ 心配なくていい……、だから……」

先程の新一の忠告に応じ、蘭はゆっくりと首を縦に動かしただけだった。……新一が安心したのも束の間、蘭は真っ青な顔で目も固く閉じたまま、首をだらりと傾けた。

「……！？ ら……ん？ 目え開けろっ！ おいつ返事しろ！ なあ、おいつ！」

……さっきまで“喋るな”なんて言っていたクセに、今度は“返事しろ”なんて、勝手だな……等という考えも今の蘭に考え巡らす事は出来ず。

雪が降ってきた。上着で抑えきれなくなった血液が地面に落ちる。その鮮血の血だまりの中に、真っ白な雪が吸い込まれてゆく。否応なしに血だまりの一員となる。

袋を落とした際に割れたと思われるシャンパンも虚しく流れでていた。

そんな寒空の中、遠くから聞こえる救急車の合図と、新一の叫び声だけが悲しく響いていた。

FILE 02：悲傷（後書き）

よく考えたら、この話季節ハズレだなあ……なんて事は気にしない
（^ー^；）

個人的に、実写版再び！と聞いて、少なからず……いや、大いに
ショックを受けています。実写ファンの方すみません。
では、失礼しました。

FILE 03：喪失（前書き）

久しぶりの投稿な気がします。どうか忘れないで下さい……（T
T）

FILE 03：喪失

昨日の雪が嘘のように、美しい朝日が差し、清潔感溢れる白い病棟……否、人々の様々な思いが交差した、灰色の病棟と呼んだ方が相応しいのだろうか。

その一室に、うなだれて表情を読み取る事が不可能な新一の姿があった。同室には、蘭の父親である毛利小五郎、母親である妃英理。しかし当の本人は、この部屋にはいない。

「……おい、新一。お前、もう帰れ……」

小五郎が口を開いた。

「そうね……。園子ちゃんにも帰ってもらったわ。あの子、肉体的にも精神的にもボロボロだったもの……」

続いて英理も、新一に帰宅を促すように言った。その英理も、自分の発言の園子の様子に負けず劣らずボロボロであった。

「……………」

黙ったままの新一に痺れを切らせたのか、小五郎が声を上げる。

「……おいっ！ お前聞いてんのかっ！？」

「……蘭……を……」

「ああ？」

新一の言葉を聞き取る事が出来ずに、新一に聞き返す。

「……蘭さんをこんな目に合わせてしまい申し訳ありませんでした
っ……」

そう言いながら深々と頭を下げる新一の声は、僅かに震えていた。

「新一……」

「新一君……」

ほぼ同時に二人——小五郎と英理の声は重なり、新一の耳に届く。

「僕は蘭さんを守れなかったんです……。だからっだからっ……。俺
が蘭を殺したも同ぜっ……」

「……新一、顔上げろ」

新一が徐々に勢いを増しながら紡ぎ出す言葉に、言い終わらないうちに静かに言葉を挟んだ小五郎。

新一が小五郎の言うとおり、素直に顔を上げた瞬間。

胸ぐらを掴まれ、小五郎の拳が新一の左頬に入り、直後痛みが走った。……痛みが走ったのは、頬からただけではないだろう。新一は倒れるようにしてよろよると壁に寄りかかり、そのままずると腰を下ろした。

「……………あなたつつ！」

英理の声が静かな病室に響いた。

「意味わかんねえ事抜かしてんじゃねえよ……。お前が自分を責めるのは勝手だが、それでどう変化するんだ……。俺はお前に何も求めちゃいねえ……。何も思っちゃいねえ……。お前がなあ、幾ら自分を責めたところで何も変わらない、何も戻らない……。」

英理は声を殺して静かに泣いていた。

「蘭は死んじまったんだよ」

英理は泣き崩れた。全ての思いが頭の中に巡ったのだろうか。

もう何も聞きたくないとばかりに小五郎は新一に背を向け、今まだ泣き崩れたままの英理に手を差し出した。

「英理……行くぞ」

そう言い、俯いて病室を出て行った二人の後には、白い部屋に一人、新一の抜け殻が残された。

FILE 03：喪失（後書き）

明日（10月8日）は待ちに待った“映画 名探偵コナン 瞳の中の暗殺者”ですねっっ！！ 最近全く放送がなく、マジがっかり…マジ有り得ない… という感じにテンション下がりが気味だった私にとってこの放送は感無量です（ ）

どうでもいい事を長々書き記してしまいましたが… いつも読んで下さり日々感謝の気持ちでいっぱいです。「本文よりココ（後書き）の方が内容濃くなっ？ とか思わないで下さいね…」（^| ^ ;
）

FILE 04：心奥

あちらこちらからすすり泣く声が聞こえる。時々、泣き叫ぶ声も耳に入る。

大きな式場は制服や黒服を身にまとった人々でごった返していた。その誰もが暗い顔をし、早すぎる死を悔やんでいた。それとは対照的に、人々を前に笑顔を見せる恋人。楽しそうに笑う蘭らんがその表情を見せたのは、確か……。トロピカルランドへ二人で遊びに行ってきたか……。新一は思った。

「……工藤」

自分と呼ぶ声に、新一は振り返った。そこにいたのは学生服姿の服部平次と遠山和葉だった。

「服部……と和葉ちゃん……」

和葉は留めなく流れる涙を必死にハンカチで抑え、顔を上げた。

「工藤くん……」

「和葉は先親父達んとこ行つとき」

平次は和葉を彼らの親のところに戻っているように指示した。

「……工藤、俺ら今姉ちゃんとこ見てきてん。なんか、安らかやつたちゅうか、なんて言ったらええんか分からへんけど……。お前もう見てきたんか？」

平次は一つ一つ言葉を慎重に選んでいる様子で新一に話しかけた。

「俺は、いい」

新一は俯いて平次の質問に答えた。平次は大きく目を見開いた。

「“いい”てお前……。会ってへんのか？ 今会わなかったら一生後悔すんで」

「……俺は」

新一は俯いたまま呟く。

「工藤はそれでようても、死んだあの姉ちゃんはそれじゃあかんねん、絶対」

「……死んだって何だよ。誰が死んだって言うだよ……。誰も死んでなんかねえんだよっ！」

新一は顔を上げて、平次の胸ぐらに掴みかかった。

「工藤……」

平次は彼自身の胸ぐらを掴む新一の目を真っ直ぐ見据えて、静かに言った。

「お前、目エ覚ませや……。病院行つたんやろ？ 姉ちゃんの死をその目で見たやろ？ 人は死んだら生き返ったりはせえへん。その人の死を受け止めなあかんねん。それはお前が、探偵であるお前が一番知つとることちゃうんかつ！？」

新一は自分の手を平次から離した。ようやく解放された平次は、胸元を軽く整える。

「……そうだよな。そうなんだよな。でも、俺が最後あいつの顔を見た瞬間、本当に死んだんだって認めざるを得ない。……怖いんだ。そんな簡単に受け止められねえよ」

新一は笑っていた。今にも崩れそうな表情で。自分自身のその姿を嘲るかのように。

新一は蘭の死を自分のせいだと責めている——平次は小五郎からそう聞いていた。

その時点で彼は彼女の死を信じたくなくとも受け止めているのだと思っていた。ところが、それは単なる憶測に過ぎなかった。彼はまだたったの十七才で、高校生で、未熟だった。何が工藤新一をそこまでの大人に見せていたのかは分からない。いや、彼が大人だろうと、生身の人間である限りこうなることは必然的なかもしれない。

しかし、平次は悟った。

——無実の罪と彼女の死に苦しむ彼を、自分が支えてあげなければならぬのだ、と。

FILE 04：心奥（後書き）

どのくらいぶりの更新でしょう。すみません……。なんだかんだ
で彼らと同じ学年、同じ歳になりました。時が経つのは早いなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6386c/>

明日に見えるは.....

2010年10月11日06時31分発行